

## 32 研医会図書館所蔵『眼科龍本論』収載の方剤について

安部 郁子

公益財団法人 研医会図書館

研医会図書館所蔵の『眼科龍本論』は、眼科の医論と治療法、薬性論、処方、眼図をまとめ上げた眼科医書である。巻頭におかれた「眼科龍本論 十六巻」部分は危亦林編集の『眼科龍本論』と同じ内容で、1.「眼科総論」から14.拾遺十六方までは研医会図書館所蔵の他の2種の写本『眼科龍本論』と同じである。『眼科龍本論』巻五とされる眼科症例図はこの本の特徴であり、合計162もの彩色の眼図が載せられている。眼図は①番号の振ってある72症図 ②番号のない28図 ③針を刺した8図 ④小児の眼病図17図 ⑤眼の形が崩れた症例27図 ⑥「口傳在」と書かれる4図 ⑦「桃宮目薬一國一人傳」図 ⑧「瞼所属之図」 ⑨五歳に通じる位置を示す図 という9種があるが、このうち①の72症例には簡単な解説と方剤名が記されている。ちなみにこの72症例は巻頭の「眼科龍本論」で取り上げられている72証とも、『新編鴻飛集論眼科』（太醫院傳七十二証明目仙方）や『葆光道人秘伝 眼科龍本論』の内容とも異なるものである。今回はこの眼図に添えられた方剤名を調べて、この『眼科龍本論』がどのような系統の眼科術を伝えているのかを探ってみた。

**【方法】**『備急千金要方』『千金翼方』『医学正伝』『万病回春』の眼目門並びに『家里流目薬並 灌頂之巻』に挙げられている方剤や生薬名を集め、『眼科龍本論』の方剤名と比較した。

**【結果】**まず、『眼科龍本論』72症図収載の方剤名では龍腦散が25で最多。辰砂散12、竜砂散9（但し、辰砂散と竜砂散は同じものかもしれない）、その後は黄連湯8、珍珠散6、瀉肝湯と尊重丸5、兎絲子円4、黄芩湯・撥雲散・三黄円・瀉心湯・小兎絲子円・補肝散・明上散が3、莪朮湯・紅梅散・光明丹・地黄丸・真珠散・腎着丸・清肺湯・川芎湯・内補散・菩薩散・明眼地黄円・目明散・木香流氣飲・竜龍散が2、黄蘗・温腎湯・過仙丹・菊花散・羌活湯・麒麟散・決明散・五香湯・五香麻黄湯・止血散・湿白丸・小統命湯・沈香散・生氣散・大黃円・内通散・白芷湯・防風湯・補肝湯・明珠散・明目地黄円が1であった。他に、甘草と防風で「目を洗う」というものが1か所みられ、灸については4か所、鍼については3か所の言及があった。

このうち、他の医書と共通の方剤は、決明散、三黄丸、地黄丸、瀉肝湯、真珠散、撥雲散、補肝散・丸、龍腦散、洗眼湯の9つの方剤であった。共通の方剤名が最も多かったのが『備急千金要方』で、16の方剤に共通名がみられた。瀉肝湯が3種、補肝散・補肝丸が9種、他に洗肝乾鹽煎方というものがあり、「肝」の文字がつく方剤が合わせて13もあった。やはり、目については「肝」を手当てするという考え方が表れている。瀉肝湯については生薬名の挙がっているものが2種あり、それぞれ異なる構成であったので、その2種の瀉肝湯に共通の生薬、芍薬、澤瀉、枳実、梔子人、竹葉についても『備急千金要方』眼目門の中に記されている生薬名を調べてみたが、竹葉8、梔子人6、澤瀉5、芍薬4、枳実3という結果であった。2番目に共通の方剤が多かったのは『家里流目薬並 灌頂之巻』であった。『眼科龍本論』には家里流代々の名前と住まいの地が書かれた部分があるとおり、この本は家里流の人物がまとめたものと思われるので、共通のものが多くは当然のようでもあるが、「肝」の文字のつく方剤は瀉肝湯1種で、補肝湯・補肝丸はひとつもなく、『備急千金要方』と対照的である。3番目は『千金翼方』で7か所、4番目は『万病回春』で6か所、5番目は『医学正伝』で、3か所の地黄丸のみ共通であった。宋改を経た『備急千金要方』とはいえ、隋唐の眼科が伝わり、「龍樹」の名から「龍本論」と名付けられたと言われるこの本が、方剤名から捉えても『千金方』『千金翼方』と共通項が多いことがわかり、伝承のとおりの結果となったと思う。